

---

# 神に願う。

雨猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神に願う。

### 【Nコード】

N7277L

### 【作者名】

雨猫

### 【あらすじ】

神様と、その従者の人間と。彼が愛した世界さえ、彼女の手によ  
り消えていく。

全知全能の神様に、彼は願う。たった一つの願いを、捧ぐ。

## （前書き）

神様と、人間の話。

読んで下されば嬉しいです^^

「この世界にはもう…幸せは必要ない」

溜め息混じりに零された言葉。諦めたように呟く彼女は、深く息を吸ってから、もう一度こう告げた。

「終わらせよう」

全てを吹っ切ったかに見える、透明な笑顔だった。神様は、この世界の創造主たる神様は、この世界に飽きてしまったのではない。ただ、この世界に失望しただけ。

「どれだけ幸福を与えても、人は自らの手で不幸を産む。争い、互いを傷つけ合う…。そしてそれが復讐を形にし、悲劇となる。そんな世界に…私にもう出来ることなど何も有りはしない」

あの時の僕は、どんな表情をしていたらう。何を思い、何を感じたのだろうか。

流石だ、と崇めただろうか。

その通り、と納得しただろうか。嘘だ、と嘆いただろうか。

馬鹿だ、と嘲笑っただろうか。

残酷だ、と罵っただろうか。

…もしかしたら、何とも思わなかったかもしれない。

ただ、こう返したことは覚えている。肯定の返事「はい」と。

全知全能の神様が何も出来ないと言うのだ、ただ隣に居る僕に出来ることなど見当も付かない。

神様は、何かを言おうと口を開きかけたけれど、途中で止めてしまった。きっとあの世界を愛していた僕に対する謝罪か慰めの言葉を探したに違いない。だが、それを不必要だと考えたのか、結局は何も言わなかった。

僕は、神様の永遠の理解者であることを決意した。だから、今回の「世界を壊す」という行為も理解しなければいけない。

僕がこれからすべきことは、神様のお側であの世界の終焉を見届けることだ。

神様は、ゆつくり地上へ手を翳した。

途端に世界は業火に焼かれた。真紅の炎がああ騒がしかった都会の上を踊っている。その炎は僕に薔薇の花を連想させた。

一瞬、世界から黄金の光が放たれた。瞼を閉じたその一瞬に、世界は終わってしまったんだろう。

次に見た世界はただの荒野。世界の終わりの瞬間すら、僕は見るこゝとが叶わなかった。悲しいとは思わなかった。けれど何とも言えない喪失感が身体中を駆け巡っているようだった。

神様は暫く目を伏せていた。

失った世界に想いを馳せていたのかもしれないし、ただ単に考え事をしていただけかもしれない。

どちらかだったのか、神様の心を読み取る能力など僕にはない。神様はいつも近くに居るが、その心は計り知れない、決して手の届かない場所にあるのだから。

だが、あんな醜い世界だったとはいえ、自らの創り出した世界を壊すのは苦痛だったと感じていてほしい。ああ少しの間の沈黙が彼女なりの哀悼だったと思いたいのだ。

やがて、彼女は瞳を上げ「終わった、か」と短く言った。

僕は知っている。知っている。あの判断が神様なりの世界への愛情

だったと。けれどあんな無慈悲な愛など愛である訳がない。  
非情だ、あまりにも。

そのことに、彼女が気づける日はこれから先ずっと来ない。何故なら彼女は人の心を持ち合わせていないから。彼女は神様だから…

これからもきつと彼女は、あの無慈悲で非情な愛を、人々へと与え続けるのだろう。

その行動を僕は永遠に理解し、隣で見続けよう。それが僕の使命。

先ほどの彼女の呟きに答え頷く。そんな僕を見て、彼女は優しくに笑った。

もしも、もしも彼女が僕と同じだったら…人間だったなら。どんな表情で笑っただろうか。同じ立場で彼女と知り合えていれば、違う形で傍に居れただろうか。

この憧れに似た感情を、伝えることが出来たのだろうか…。

考えてから、その仮定は無意味だと思った。起こらなかった過去をあれこれ推測しても、何の意味もない。  
馬鹿馬鹿しい。そう思った。

「さて…次はどんな世界にしようか。人の争わない平和な世界がいい」

世界への愛情で満ち溢れた神様。いつかその愛が間違っていることに気づいて下さい。そんなことができないのは分かっている。だけど、あんな風に壊れる世界など、もう二度と見たくない。

「次こそは…うまくいくでしょうか」

不自然な間が空かないように、会話を繋げる。  
問いかけのような、願い事のような言葉を返す。

「さあ…未来は分からない」

彼女の言葉を聴き、初めて僕は神様にも未来は分からないのだと知った。



（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

彼と彼女の近くて遠い、相容れない、されど、解りあえる。

そんな関係を感じ取って頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7277l/>

---

神に願う。

2010年10月25日22時09分発行